
新月の祈り

雲雀-tyongdari-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新月の祈り

【Nコード】

N15290

【作者名】

雲雀 - t y o n g d a r i -

【あらすじ】

昔むかし、この日本において婚礼がすべて家柄や身分で決められていた時代。

新月だけの切ない恋の行方は……

…… 新月の祈り……

あの人に出会えますように……

二つの記憶があるといったら、貴方は信じますか？

私には現在の記憶、そしてもう一つ、前世の記憶、
愛しい人と一緒になれなかった、悲しいけれど、
とても綺麗な記憶。

そして、私は探している。
愛しい人を。
必ず会えることを信じて。

それは色褪せることのない恋

「…… なんて静かな夜……」

たまひめ
珠姫が格子を開けて夜空を見上げる。
今日は新月。

月明かりは届かず、音もなく、辺りは静まり返っていた。
珠姫はしばらく格子を空けて、
黒い世界の遠くに見える、小さな、それでいて力強い光を見つめていた。

どのくらいそうしていたのか……

おもむろに立ち上がり、格子を閉め、部屋を出る。
長い廊下を歩く。

静かな夜に衣擦れの音だけが微かに空気を揺らしていた。
珠姫は辺りに誰もいないことを確認し、屋敷から外へ出た。
外は少し肌寒い。

しばらく行くと少し草臥れた建物が見えてきた。
歩調を少し速める。

扉に手をかけようとしたとき、中から扉が開いた。

中から男の人が珠姫の手を取る。

「^{かつら}桂様」

珠姫が男の名を愛しそうに口にする。

「珠姫、会いたかった……」

桂は珠姫をそっと抱きしめる。

珠姫は桂の腕の中、瞳を閉じる。

「わたくしも……お会いしとうございました、桂様……」

お互いをしっかりと、それでいて優しく抱きしめあう。

桂が静かに珠姫を横たえる。

珠姫はすべてを桂に任せる。

「珠姫……」

「桂様……」

どちらとも無く二人の唇が重なった……

真つ暗な空気の中、窓から入ってくるひんやりとした風が二人を優しく包んでいた。

「そろそろ夜が明ける……」

桂が珠姫の身体を支える。

「桂様、そろそろお帰りになりませんか……」

珠姫は桂の手をそつとはずす。

「桂様、」

珠姫が桂の名を呼ぶ。

「わたくしたち、これを最後にいたしましょう」

桂が息を呑む。

「貴方様とわたくしでは身分が違い過ぎます」

珠姫が悲しげな笑みを浮かべる。

「わたくしは、十分幸せでした。桂様に愛していただき、とても幸せでした」

桂が珠姫を覗き込む。

「ですが、いつまでも今のままではいられません。桂様わたくしたちこれを最後にいたしましょう」

珠姫の口調は静かだった。

桂は苦しそうに顔を歪ませる。

「私は自分の愛した者ですら幸せにすることは出来ない……」
桂は下を向いてしまう。

珠姫が桂の頬に手を添わせる。

「そんなことはありません。わたくしはとても幸せです」
珠姫が優しく微笑む。

「貴方様に会えたことがわたくしの幸せなのですから」
桂の手が珠姫の手に重なる。

「私達のいるこの世の中がもっと自由だったなら、私達はこんなにも苦しまずにいられたのだろうか……」

桂の瞳から一筋の涙がこぼれた。
「笑ってください。桂様。最後に貴方様の笑顔を覚えておけるように」

珠姫の瞳も潤んでいる。それでも笑みを絶やさない。

「……珠姫、私はそなたに誓う。現世では叶わなかったが、来世では一緒になるう。私は必ずそなたを見つける」

珠姫の瞳から涙が溢れ出た。

「……お待ち、しております……」

その言葉を聞いた桂はととても優しい笑みを浮かべた。

珠姫も涙に濡れた頬に笑みを浮かべた……

「お母様？」

珠姫が我にかえる。

どうしたの？ と不思議そうに珠姫を覗き込む小さな女の子。

「桂奈^{かな}」

珠姫が桂奈を抱く。

「なんでもないのよ」

珠姫が桂奈に向かって微笑む。

「お母様、お父様のお話して」

桂奈がニツコリと笑いながら珠姫にせがむ。

「そうね。桂奈はお父様が大好き？」

「うん！ でも桂奈会いたかったなあ～お父様。今お空の上でなにしてるのかなあ～」

桂奈は空を見上げる。つられて珠姫も空を見上げる。

桂様、貴方様は喜んでくださるでしょうか？

桂奈が生まれていること。

貴方様が知ったらどう思われるのでしょうか？

桂奈には貴方様は亡くなったと伝えていること。

あの子がかわいそうだから……

わたくしは後悔はしていません。貴方様の御子を授かったことを。貴方様とわたくしの唯一の証。

神様がわたくしに唯一与えて下さった、桂様に愛された証。

「？」

何か向こうのほうで騒がしい。

「桂奈、ちょっと待っていてね。見てくるから」

珠姫は桂奈に優しく笑いかける。

「うん、後でお父様のお話してね」

珠姫うなずく。桂奈はうれしそうに笑った。

「何事ですか？」

珠姫の声が響き渡る。

一人の女中が珠姫の言葉に応える。

「珠姫様、またあのお方です。今度は珠姫様を自分の屋敷にお連れしろと……」

女中の言葉が次第に小さくなる。

「お屋敷に……」

珠姫の顔が曇る。

「そうでなければ……この屋敷を潰すとまで……」
「なんとということ……」

珠姫は口元を着物の袖で覆う。

そして、しばらく考えた後、

「わかりました。お屋敷へ参ります」

珠姫のその言葉に、その場に居た女中達が泣き崩れた。

「およく来た」

珠姫を出迎えたのは良く太ったこの屋敷の主人。

ニタツとした笑いを珠姫に向ける。

珠姫は言われるままに屋敷の中に足を踏み入れた。

「珠姫殿」

主人が珠姫に近づく。

「このような身分の低い女に、何用でございましょうか」

珠姫は前を向いたまま、無表情で言葉を紡ぐ。

「わかつているのであろう。」

そう言いながら主人は珠姫の手首をつかむ。

主人に手首をつかまれ、珠姫は倒れこむ。

「何をなさるのですか！！ おやめください！」

珠姫は主人の下から抜けようと暴れるが、力で叶はずもなく、

珠姫は帯の部分から短刀を取り出し、主人に突きつける。

珠姫の顔は悲しみに溢れていた……

主人はそれを見て、珠姫から離れる。

「わたくしから離れてください。わたくしは誰のものでもない、わたくしだけのものです。」

珠姫の声に迷いはなく、凜とした力強い声だった。

「な、何を」

主人の声は上ずっていた。

「わ、私に、は、齒向かうのか？ そんなことすればそなたの娘も無事ではないぞ！」

その言葉に珠姫の動きが止まる。

「……卑怯です……」

動作の止まった珠姫に対して、主人が勢いを取り戻す。

しかし、その瞬間、

珠姫の身体はゆっくり崩れていった……

珠姫の首筋からは絶えず血が流れ出していた……

桂奈、ごめんね。

幸せになってね。

桂様、わたくしはとても幸せでした。

このようなことで命を絶つわたくしをお許してください。

もし、生まれ変わることが出来るのなら……

珠姫のもう開かない瞳から一筋の涙が零れた……

悲しいけれど、

とても、綺麗な記憶。

そして、私は探す。

あの人を。

今でも愛しく思うあの人を。

それは色褪せることのない恋

…… 新月の祈り……

あの人に出会えますように……

（後書き）

ちょっと綺麗すぎるような気はしますが……

満月ではない、新月だけに合うことのできる恋人たち。
というのを書いてみたかったんです……（^^）

いかがだったでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1529o/>

新月の祈り

2010年10月14日23時25分発行